特集　高知大空襲の記憶

忘れもしないあの日のこと

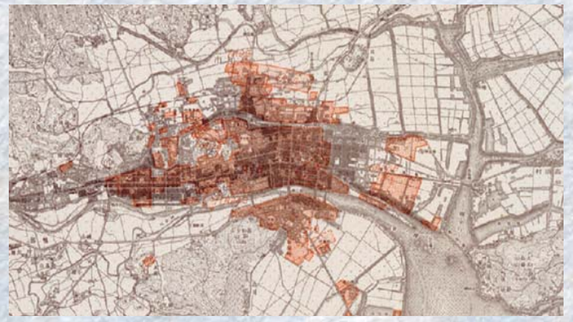
少女が駆け抜けた「火の海・高知」

8月15日で、69回目の終戦記念日を迎えます。平和な世であるために戦争の記憶を風化させないよう、毎年8月号では戦争に関する特集を掲載しています。

今年は戦時中、高知市に住んでいて高知大空襲を体験された山中起世子さん(野市町)からいただいた手記をご紹介します。「戦争ほど酷いものはない」貴重な実体験をつづってくださっています。皆さんどのように感じられますか?

～誌面用に編集して掲載しています～

【空襲後の高知市の様子】所蔵：高知市教育委員会　寄贈：タカハシ写真館
写真中央上に追手前高校、高知城が残っている(右側は江ノ口川と高知橋)



【空襲図】赤く塗られているところ(高知市中心部)が被害にあった

一九四五年七月四日、大東亜戦争(当時はこう言っていた)の真最中で、高知市は大空襲を受けて、丸焼けにされてしまいました。私はこの時、女子師範附属国民学校(現在の小学校)の六年生で、家は、中心部のはりまや町、現在の四国銀行本店のある場所でした。

これまでにも、梅ノ辻や、九反田にも爆弾や焼夷弾(しょういだん)を落とされ、我々子どもたちは怖くて、早く戦争が終わらないかと思い願っていました。

逃げ回るこの戦争はこりごりだと、口に出して言えば非国民だと言われ、いじめられます。心の中では「勝って早く戦争が終ればいいのに」と願っていました。

安堵の直後

この日の夜、警戒警報が鳴り出し、そのすぐ後には空襲警報が鳴り出しました。私たちは急いで防空壕へ飛び込みました。

やがて警戒警報になり、警報解除となりました。七月の暑い夜でしたから、それぞれ防空壕から出て頭巾を脱ぎ、服も脱いで、やれやれとうちわを扇いでいました。すると突然「カン、カン、カン、カン」と退避の鐘が鳴り響きました。

幼き日の私。写真好きのお父さんが撮ってくれた

みんなは慌てて、服や頭巾を取る間もないくらいで、一目散に防空壕へ飛び込みました。先程来た敵機が、折り返して来たのです。

多くの敵機をつれて引き返して来たのだろうと、大人たちが言っていて、とても悔しい思いをしました。敵機は南から北へ入り、次に東から西へ焼夷弾を落としていき、次に西から東の方へと行き、北から南方向にと周囲を焼き、最後に「ドカン」と多くの焼夷弾を中心部に落としていき、私たちの逃げ場はなくなってしまいました。

家の倉庫の窓は、ひとりでは開けられないほど厚いものでしたが、何と一瞬で「パッ!」とすべての窓と扉が開き、火を吹き出してしまいました。壕の中からのぞいていた母は、びっくりして動けなくなってしまいました。

在りし日の我が家
空襲で焼けてしまった

火の海を駆けた

焼夷弾は空中で花火のようにパッと開き飛び散って、見る見る内に、町は火の海となりました。周囲は熱いし、逃げ場がないので、みんなは鏡川へと逃げました。その間にも火玉が散り、あっと言う間に人間は丸焦げになっていきます。走っていた格好のままで倒れ、すぐ真黒に焼けてしまうのです。私たちはその黒焦げになった人たちを飛び越えて行かねばなりませんでした。本当に辛かった出来事です。

父は町内会長でしたから最後まで残り、人々の救助と指導をしていましたから大変心配をしました。

電車通りもほとんど焼け落ちた

▲空襲時の熱で溶けて固まった硬貨
焼夷弾の熱量は1,000℃を超える

▲焼夷弾…筒の中に黄燐などの油脂が入っていて、それに火が付き燃焼する
ひとつの爆弾にはこの筒が38本入っている